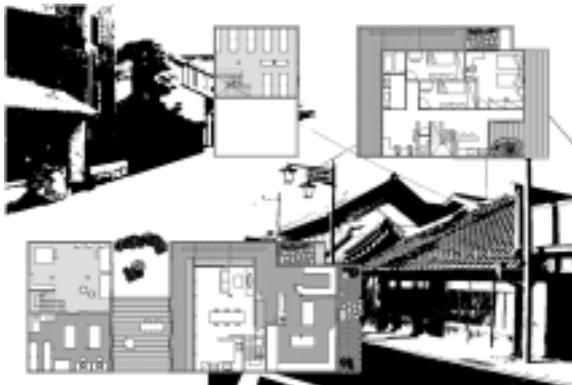




東京電機大学 情報環境学部 情報環境デザイン学科
林 克臣

現在、日本の町並は、個々の建物は機能的ではあるが、全体として見ると統一感や個性がなく乱雑になっている。特に古い町並が残る場所では景観を損ねない町並づくりが重要だ。しかし、昔から残っている建物を復元するだけでは進歩がなく無機質な博物館のような町並になってしまう。そこで茨城県真壁町御陣屋前通りを対象に、町並を構成しているデザイン要因を取り込みながら連続性を損なわない町並を考えた。約 200 棟もの歴史ある建物の歴史性を保ちつつ見世蔵の持つ特徴を生かし、プライベートとパブリックな空間、奥にいくほど、上に行くほどパブリックな通り沿いからプライベートな空間に移行していくデザインコードを提案した。



講 評

歴史的な遺産を再評価する機運の高まりは近年ますます盛んで、その対象も建物から町並みまでさまざまであるが、先人の残したものの価値を見直す意味は大きい。作者は残されたものを復元するだけでは博物館的になってしまうと言い、新しく建てる建物に町並みを構成しているデザイン要因を取り込んで、町並みの連続性を損なわないあり方を提案しようとしている。既存の町並みからデザインコードを読み取ることがこの作品の主題で、作品はその応用の例として提案されている。町並みとして真壁町の御陣屋前通りの見世蔵をモデルにし、作者は見世蔵のパブリックなゾーンからプライベートなゾーンへの空間のシフトするあり方を町並み構成の要因として着目した。既存の町並みに価値を感じ、それを守るだけでなく本質的な部分で継承してゆこうとするの提案は、地に足のついた堅実な考えである。しかし、応用例として提案された作品を見て、改めてこのような提案の難しさを感じた。町並みを構成するデザインコードとは、地域の風土全体が係わる多面的なものとして理解しなければ、私たちを感動させるものの本質は見えないのではないかと感じる。若い作者が町並みを愛する気持ちを忘れずに、更に深く見る眼を養ってくれることに期待したい。

[審査員 稗田 忠弘]